

「嫌われ者」を通して見る宗教戦争としてのスムータ

—— ワシーリイ・シュイスキイとズィグムント3世 ——

三 浦 清 美

はじめに—宗教戦争として考えるスムータ

本稿が扱う時代は、16世紀後半から17世紀はじめにかけて、ポーランド＝リトアニア連合国家が斜陽に向かい、スウェーデンが本格的勃興のまえに力を蓄え、ロシアはイワン雷帝末期からの混乱が続き疲弊していた時代である。モスクワ大公国、ポーランド＝リトアニア共和国、スウェーデン王国からなる環バルト海圏の宗教的寛容と不寛容の諸相を明らかにするために、本稿では、あぶれた嫌われ者として、ロシアからはワシーリイ・シュイスキイを、ポーランド＝リトアニア連合国家からはズィグムント3世を選び、ロシアとポーランドという水と油のようにかけ離れていた両国が、この限られた期間に限って、文化的なエネルギーの交換をおこなっていたことについて考察する。

一見すると、ポーランド＝リトアニア連合国家のカトリックと、スウェーデン王国のプロテスタントと、ロシアの正教とが衝突したというイメージが浮かぶかもしれないが、この捉え方はあまりにも単純化されていて、スムータの宗教的ダイナミズムを十分に捉えるものとは言えない。当該の時代、ポーランド＝リトアニア連合国家はルネサンス的な精神の高揚につつまれ、一般の気分として宗教的寛容が支配的であったため、かなり特殊な条件が重ならないかぎり、宗教的ファクターが前景化しなかったし、一方のロシアでも、政治と宗教が合体したイワン雷帝統治の苦い経験の反省から、ツァーリ専制を離れた政治のあり方が模索されていたからである。

ポーランドとロシアは同じスラヴ人であり、スラヴ人の拡大、分住がはじまる以前の6、7世紀には、同質の文化をもっていたと考えられるが、西に位置したポーランドはローマからカトリックを受容し、東に位置していたキエフ・ルーシ（のちのロシア、ウクライナ、ベラルーシ）がコンスタンティノープルから正教を受容することによって、両国はほとんど水と油のように異なる文化を形成することになった。ポーランドは西欧の文化が流入してルネサンスが開花し、（シュラフタ間での）自由と平等を旨とする西欧文化の防壁となったのに対し、ロシアはビザンツ流の統治概念を継承し、多大な犠牲を払いながらも、「神の代理人（アウトクラトル）」による統治体制によって強力な国家を完成させた。

しかし、16世紀末から17世紀初頭のこの時代、ルネサンスに飽いたポーランドがロシアの専制



【写真1】 ズィグムント3世、ヨーゼフ・ハインツ兄、1605年

を模倣し、専制に疲れたロシアがポーランドの自由と平等を模倣するということが起こった。ロシアで権力のあり方についてこうした模索を行ったのは、大貴族を中心とする支配層だったが、民衆はこれに対して最終的にNOを突きつけた。スムータの最終段階で、ニージニイ・ノヴゴロドの商人ミーニンの財政的支援のもとに、ポジャルスキ公を指揮官とする第2次国民軍が組織され、ツァーリ専制を軸とする国家再建が目指され、ミハイル・ロマノフがツァーリとして戴冠した。

スムータが本質的に「宗教戦争」であった所以は、ポーランドの自由と平等から燦り出され、ズィグムント3世【写真1】において先鋭的に現われたカトリック護教のバトスと、ロシア正教を最終的に政治の前面に引っ張り出したロシア民衆の宗教的バトスとの対決という側面が確実にあったからである。本稿が考察の対象とするのは、一つはスムータ時代後期におけるその宗教的ダイナミズムであり、もう一つは宗教に立脚したロシアの愛国主義のある種の必然性である。

1. イワン雷帝のロシアとポーランドの黄金の16世紀

17世紀初頭のスムータと呼ばれる動乱時代には、1610年6月から1612年10月までの2年4か月間、首都のモスクワはポーランド軍によって占領統治された。このことから明らかなとおり、スムータは、この動乱を乗り越えてロシアという国が継続したことが実に不思議なくらい、ロシア史でも稀なほど不安定な時代である。スムータ時代のロシアは、イワン雷帝の息子であるフォードル1世からはじまり、ボリス・ゴドゥノフ、偽ドミートリイ1世、ワシーリイ・シュイスキ、

偽ドミートリイ2世、ミハイル・ロマノフと君主が目まぐるしく変わっていき、ツァーリ専制というロシアに伝統的な統治スタイルの見直しも行われていた。

上記の指導者のうち、能力のうえで優れていたのはボリス・ゴドゥノフで、イワン雷帝以来の中央集権化政策を推し進め、ロシアを府主教座から総主教座に格上げするなどの功績も多いが、ツァーリとして戴冠していたにもかかわらず、ツァーリとしての人気はなかった。人気のないボリス・ゴドゥノフに比して特異な存在感を際立たせているのが僭称者である。事故で死んだとも、ボリス・ゴドゥノフによって暗殺されたともされたイワン雷帝の遺児ドミートリイ皇子は実は生きのびているという噂が広まり、偽ドミートリイ1世、スタンボルの偽ドミートリイ、偽ドミートリイ2世などが次々と現れた。偽ドミートリイ1世にいたっては、クレムリのウスペンスキイ聖堂で戴冠式さえ挙げている。

天上の神パントクラトールの地上における代理人アウトクラトールたるツァーリという観念は、ロシアでは、支配層ばかりではなく民衆にも共有されていた。ツァーリを頂点に置く統治体制の確立に決定的な役割を果たしたのがイワン雷帝である。イワン雷帝の存在そのものが、神の代理人たるアウトクラトールというものを、完璧を求めて生身の人間が体现するとどうなるかという気宇壮大な実験だった。地中海文明圏に属するビザンツ帝国で、このような無謀な実験の前例はなかった。この実験はロシア民衆に権力からの抑圧という悲惨な経験を強いたが、強力な君主による中央集権化を通じて強力な国家を樹立するという成果をもたらした。ロシアがシベリアにその版図を広げ、世界で最大の領域をもつ国家となったのは、まさにイワン雷帝の時代である⁽¹⁾。

17世紀初頭に、ロシアのこの強力な専制君主の存在を、羨望の眼差しで眺めていた人物がいる。スムータの影の主演ともいえるべきポーランド＝リトアニア連合国家の君主ジグムント3世である。この人物が、本稿の一人目の主人公である。

イワン雷帝がロシアで君臨していた16世紀中葉、ポーランドもまた自らの黄金時代を経験していた。中流貴族であるシュラフタが君主の権限を大幅に制限することに成功し、シュラフタ同士の平等に基づく民主政を開花させていた。ロッテルダムのエラスムスは、1523年にポーランド王ジグムント1世の財務大臣だったユストゥス・デツイウシへ宛てた書簡において、16世紀ポーランドのルネサンス文化の成熟を讃えている⁽²⁾。

宗教改革によって生まれた宗派の対立はポーランドにも及んでいたが、ルネサンス文化の繁栄の根底には、宗派对立を極力避けようとする寛容の精神があった。この宗教的寛容の精神に挑戦したのが、対抗宗教改革の申し子ともいえるべき国王ジグムント3世にほかならない。前述のよ

(1) スムータについては以下を参照。田中陽児ほか編『世界歴史体系ロシア史1』山川出版社、1995年；和田春樹編『世界各国史ロシア史』山川出版社、2002年。

(2) *The Correspondence of Erasmus: Letters 1356 to 1634 (1523-1524)* (University of Toronto Press, 1992), p.104.

うにロシアの君主は、リューリク朝最後のフョードル帝からロマノフ朝最初のミハイル帝まで目まぐるしく変わったが、これに対するポーランド＝リトアニア連合国家側の君主はズィグムント3世ひとりである。しかしながら、この人物は出生地であるスウェーデンでも、自らが君主となったポーランド＝リトアニア連合国家でもすこぶる人気がなかった⁽³⁾。

ロシアにも、神の代理人による統治体制による強力な国家の完成という自らの文化的達成の枠外の人物が存在する。リューリクの血筋を引いていたにもかかわらず、ツァーリの権力を制限したワシーリイ・シュイスキイである。このワシーリイ・シュイスキイが、本稿のもう一人の主人公である。ワシーリイ・シュイスキイはイワン雷帝の暴政への反省から、有力貴族との妥協を図ったが、自らがツァーリであるという自意識から自由になることはできなかった。ツァーリにふさわしい力が蓄積されることもなく、政治的手腕を発揮する機会にも恵まれず、各勢力のバランスをとることに失敗し、そもそもの人望のなさも手伝って最終的には失脚した。動乱の難しい時代であったとはいえ、ロシア史においてこれほど存在感が希薄で人気のないツァーリも珍しいと言えるだろう。

ワシーリイ・シュイスキイとズィグムント3世という自らの文化の枠外にいる「嫌われ者」たちにおいて、16世紀末から17世紀初頭という限られた時代に、水と油のようにかけ離れた文化をもつポーランドとロシアは、統治文化のエネルギーの交換をおこなっていた。以下において、その諸相を具体的に見てゆき、最終的に、第2次国民軍というロシア正教に裏打ちされた愛国主義の必然性について考えてみたい。

2. ワシーリイ・シュイスキイのツァーリへの登位

本稿は、ロシアのスムータについての考察であるから、まずはロシア側のワシーリイ・シュイスキイ【写真2】について見てゆきたい。ワシーリイは、偽ドミートリイ1世がロシア貴族たちによって謀殺されたのちにロシア貴族によってツァーリに推戴され、ワシーリイ4世となった。リューリク朝最後のフョードル帝からロマノフ朝最初のミハイル帝まで、僭称者以外でツァーリの地位に就いたのは、ボリス・ゴドゥノフとこのワシーリイ4世だけである⁽⁴⁾。

ワシーリイ4世となったワシーリイ・イワノヴィチ・シュイスキイは、大貴族（ボヤーリン、複数形ボヤール）イワン・アンドレヴィチ・シュイスキイの息子で、ルーシで最も高貴な身分で

(3) ポーランド＝リトアニア連合国家の歴史については以下参照。山本俊朗、井内敏夫『ポーランド民族の歴史』三省堂書店、1980年；伊東孝之・井内敏夫・中井和夫『ポーランド・ウクライナ・バルト史』山川出版社。

(4) 本稿2.から4.までのワシーリイ・シュイスキイについての叙述は、おもに以下を参照した。Василий Шуйский // Православная энциклопедия под редакцией Патриарха Московского и всея Руси. ほか以下も参照。Соловьев С.М. Сочинения. Кн. 4. История России с древних времен. Т.8. М., 1989. С.335-670; Платонов С.Ф. Очерки по истории смуты в московском государстве XVI-XVII вв. М., 1995; Флоря Б.Н. Польско-литовская интервенция в России и русское общество. М, 2005.



【写真2】 ワシーリイ・シュイスキイ、チトゥリャルニク、1672年

あるスーズダリ公の系譜に属する。イワン雷帝と同様に、リューリクの血を引いており、ツァーリとして推戴されるには十分な家柄であったために、そうした血筋の背景をもたぬボリス・ゴドゥノフからは警戒された。その一方で、出身のスーズダリ公家は、「ツァーリの君臨する都」と呼ばれたモスクワの統治とは無縁であったために、ほんもののツァーリと見なされるに際しても、依然ツァーリ位とは大きな距離があると受けとめられた。

シュイスキイ一族とゴドゥノフ一族とが争ったとき、ワシーリイはスモレンスクで軍司令官職にあったにもかかわらず、1587年、ほかのシュイスキイ一族の者たちとともに流刑に処せられた。流刑の地はガーリチで、その理由は、狩りのふりをしてリトアニアとの国境に行き、リトアニア人と秘密の交渉をしたというものだった。ほとんど言いがかりと言ってもよい。

1591年4月、流刑から戻り、大貴族会議 Боярская дума で自らの場所を得た。同年5月15日にドミートリイ・イワノヴィチ皇子が死ぬと、ワシーリイは調査委員会の長としてウーグリチに派遣された。調査委員会に託された仕事は、皇子の死の状況を明らかにし、ドミートリイの突然の死のあとウーグリチで起こった騒乱の原因を突き止めることだった。5月30日にウーグリチで調査を終えた調査委員会は、大貴族会議と宗務会議に、ドミートリイ・イワノヴィチはてんかんの発作のさいにナイフに倒れこんだために死んだと報告した。ドミートリイ皇子の暗殺の嫌疑がかかったボリス・ゴドゥノフを護ったかたちになったのである。これが評価されてワシーリイは枢要の地位を占めることになるが、にもかかわらずツァーリの宮廷における彼の立場はきわめて脆弱で、ボリス・ゴドゥノフは最初の妻と死別したワシーリイの再婚を禁じていた。お世継ぎがで

きることを危惧していたのであろうか。血統を誇ることができないボリス・ゴドゥノフは、名門貴族のワシーリイを警戒したのである。

偽ドミートリイが出現したあと、ワシーリイは1605年1月、増援部隊とともに軍に派遣され、ドブリニチ付近の戦いで僭称者の軍勢を打ち破った。ボリス帝の死後は、ワシーリイはモスクワに召喚され、ドミートリイ皇子はウーグリチで死に、自分は皇子の葬儀に参列したと公式に宣言したが、偽ドミートリイ1世の軍がモスクワに近づくと、大貴族会議の全体とともに、偽ドミートリイをイワン4世の息子であると認めた。

偽ドミートリイがモスクワに入城すると、にもかかわらず、ワシーリイは陰謀を組織したという咎で責めを負わされた。1605年6月30日死刑が宣告されたが、死刑が執行されるまさにその瞬間、その場で恩赦が下された。19世紀の作家ドストエフスキイと同じ体験をしたのである。ワシーリイは財産を没収されて追放刑に処せられ、投獄されたが、数か月あとに、偽ドミートリイ1世によって宮廷に戻されたばかりか、ボリス・ゴドゥノフによって禁じられた結婚が許可された。ワシーリイは大貴族会議の筆頭の地位を占め、偽ドミートリイ1世とマリーナ・ムニーシェクの婚礼のさいには千人長を務め、偽ドミートリイによって準備されたクリミア遠征において軍の指揮を任された。

しかし、ワシーリイと偽ドミートリイは呉越同舟の状態で、ワシーリイは偽ドミートリイを裏切ることになる。モスクワの貴顕たちが、クリミアとの戦争のために召集された士族の軍勢を自分の側に引き込むことに成功すると、ワシーリイは彼らとともに、僭称者に対する陰謀を計画した。この陰謀は、1606年5月17日偽ドミートリイの殺害というかたちで実現した。5月19日には、モスクワ、赤の広場に集まった民衆のまえで、ワシーリイの支持者たちは彼がツァーリであると宣言した。つづく1606年6月1日、ウスペンスキイ聖堂でノヴゴロド府主教イシードルがワシーリイを戴冠した。ツァーリ、ワシーリイ4世の誕生である。しかしながら、選出は大貴族たちによるのみで、「全地の」代表者によるものではなかったから、同時代人たちの多くがワシーリイの選出を合法的なものとは認めなかった。

3. 同時代人からのワシーリイ・シュイスキイへの悪評

ワシーリイのツァーリへの選出に際して証文が公布された。新しいツァーリは、自らの大貴族から成る真実の裁判によって裁くことなしに、誰も処刑しないし、財産を奪うこともしないし、偽りの密告を聞くこともないし、そのような密告者を罰する。「罪もないのに誰にも失寵に遭わせたりしない。」この証文は、ワシーリイ4世の治世にツァーリ権力の制限が実現したことを証言するものと捉えられてきた。

1899年にセルゲイ・プラトノフのスムータについての仕事が出た後から、ワシーリイ4世が貴族諸家門の傀儡であったという考え方が根づいている。ワシーリイ4世は大貴族たちの利害

を代弁し、このゆえにもっと広範な士族層のあいだでは不人気であったと考えられてきた。この考えは基本的に正しいのだが、スムータ期のポーランドとロシアの關係に詳しいボリス・フロリャは、いくぶん修正が必要であると考えている。ワシーリイ4世は、大貴族（ボヤール）だけではなく、イワン雷帝と同様に、かなり広範囲な士族たち（ドヴォリャーネ）をも厚遇し、「モスクワ身分」を与えたばかりではなく、ドゥーマに名門ではない家門の代表者を任じ、彼らを自らの政權への支えに転じようとしたからである。要するに、ワシーリイ4世は一方でツァーリとして君臨する準備も着々と進めていたのである。しかし、この政策は功を奏さなかった。古來からの大貴族と新参の士族、小士族とのあいだのバランスをとる政策は、結局破綻した。新興の士族を優遇するのか、大貴族との關係を大切にするのか、旗幟を鮮明にしなかったため、士族層からも、有力大貴族家門からも信頼を得られなかったのである。

もちろんこれは時代状況の難しさによるところが大きいが、それだけではなく、ワシーリイ・シュイスキの指導者としての人柄そのものにも問題があったようだ。ワシーリイ4世はボリス帝のもとで彼に侮辱を与えた人々に復讐しないと約束した。しかしながら、史料が語るとおり、「自分がツァーリ位につくと間もなく、自分の約束を思い出すことなく、彼に侮辱を与えた人々に復讐しはじめ、大貴族、ドゥーマ書記、大膳職、多くの士族たちを町々や種々の任務に派遣し、多くのほかの人々から知行地や世襲領地を取り上げた」のである。

このほかにも、スムータの同時代人たちの著作には、ワシーリイ4世の能力そのものや人柄に対する批判的評価が頻繁に現れる。曰く、報償の授与に際してケチである、制裁が度重なっている、そのさい無辜の人々が犠牲となっている、密告者を励ましている、と。また、淫蕩や酩酊などの芳しからざる特徴も指摘されていた。キリスト教的な観点からは絶対に許されないようなツァーリの所業も報告されている。ワシーリイ4世は未来についての予言をもらうために魔法使いに会っており、その何人かはツァーリの宮殿を訪れていた。口承起源のこの情報は、ツァーリの身近な人間たちの書き付けの証言によって確証されている。ワシーリイ4世を教会の貴重品を没収したとかどで非難するものもある。三位一体修道院の執事修道士アヴラアミイ・パーリツィンが伝えるところによると、修道院の包囲が終わったあとで、修道院の公庫からツァーリによって2万ルーブリの金とそのあとにさらにそこにしまわれていた金と銀の器が持ち出された。そのような持ち出しは余儀のない手段であったとしても⁽⁵⁾、当時の人々は、ワシーリイが受け取った資金を自らの懐にしまい込み、個人的に流用したと非難した。

ワシーリイ・シュイスキのために弁護をすれば、ワシーリイには、リューリクの血を引く血統的にツァーリ位に最もふさわしい者として、そうした血統の背景をもたぬツァーリのボリス・ゴドゥノフに警戒されるという確執があったし、偽ドミートリイ1世との關係においても、死刑

(5) ワシーリイ4世は、小士族、外国人傭兵部隊に給与を支払わなくてはならず、その原資が必要だった。

宣告され、執行直前に回避されたかと思うと、都合がよいと思われれば厚遇され利用されるというような、切羽詰まったいわくいいがたい困難な経験をしている。こうした経験が、裏切りを裏切りとも思わず、平然と前言を翻すワシーリイの陰にこもった複雑な性格の形成に与かったことは疑いあるまい。

4. ボロトニコフと偽ドミートリイ 2 世との戦い

1606年夏、ワシーリイ 4 世に対する南部諸地域の士族たち、零細の勤務人たちの反乱が始まった。いわゆるボロトニコフの反乱である。蜂起が広がっていくと、コサック、逃亡ホロープ、農民たちが加わり、政府の軍勢は打ち破られた。1606年10月、ボロトニコフとパシコフ指揮下の蜂起軍はモスクワを包囲したが、同年12月2日、ワシーリイ 4 世自身が、決定的な戦闘のときに軍勢とともに戦場に姿を現した。敵の陣営の分裂と国の西部諸郡の地主たちの援助で、蜂起軍はモスクワから撃退された。

翌年5月、ツァーリは自らボロトニコフの軍勢への遠征軍を率いた。同年10月10日に蜂起の中心地トゥーラが降伏した。要塞の投降に際してワシーリイ 4 世は蜂起の主たる指導者たち、ボロトニコフと僭称者ムーロム人イレイカ⁽⁶⁾らと、その命を助けるという約束を取り交わしていたが、この約束は守られなかった。トゥーラの征服のあと、ワシーリイ 4 世はモスクワに帰り、1608年1月17日、大貴族の娘エカチェリーナと結婚した。悪意ある者たちは、ワシーリイ 4 世が南部諸郡の蜂起を最終的に鎮圧するのを待たず、自分が結婚するためにモスクワに急いだという理由で、ワシーリイ 4 世を非難した。

1607年の年末、反乱は新しい力をもって燃え上がった。その頂点にいたのは、新しい僭称者、偽ドミートリイ 2 世である。ロシア南部の勤務人たちに、ポーランド＝リトアニアからの軍勢が加わり、1608年の夏、偽ドミートリイ 2 世軍はモスクワに近づいた。国の北西部の広大な領域（ブスコフそのほかの町々）がワシーリイ 4 世の支配から離脱し、封鎖されたモスクワ市でのワシーリイ 4 世の状況は危うくなった。包囲された士族たちの一部が、ワシーリイ 4 世に不満をもつモスクワ商業地区（ポサド）の支持のもとに、何度もツァーリを挿げ替えようと画策した。モスクワから送達された文書でワシーリイ 4 世は、「いまこのとき神がキリスト教信仰のために、罪なくして私たちに向けられた侮辱のために、死をも受け入れることを叶えてくださった者は、罪の赦しを得、最初の殉教者たちと等しくなることができる」と述べつつ、人々に「全正教キリスト教の擁護」のためにトゥシノ勢との戦争に参加するよう呼びかけている。

ボロトニコフの蜂起、偽ドミートリイとの戦争に際して、総主教ゲルモゲンを頂点としたロシア正教の主教たちは終始一貫、合法的な統治者としてワシーリイ 4 世を支持し続けた。ツァーリ

(6) イレイカ・ムーロメツのこと。自分をフェオドル・イワノヴィチの息子ピョートルであると宣言していた。

の挿げ替えは、ワシーリイ4世の敵たちによってモスクワ包囲のさいに何度も試みられたが、総主教は国の各地にワシーリイ4世を支持するよう呼びかける文書を送達し、ツァーリを挿げ替えようとする試みに精力的に反対した。

そこに思わぬ救世主が現れる。ワシーリイの甥にあたるミハイル・スコピン＝シュイスキイ公である。1608年夏、ワシーリイ4世はミハイルをノヴゴロドに派遣し、スウェーデン王カール9世に支援を求めた。1609年2月、ヴィボルグ条約が結ばれ、それによると、ワシーリイ4世は軍事的支援を受け、そのかわりにスウェーデンにカレリアの町と諸郡を割譲することになっていた。スウェーデンと同盟したスコピン＝シュイスキイは輝かしい戦果を収めることになる。

1609年、ポーランド＝リトアニア軍と僭称者たちのコサックの部隊が、住人たちから莫大な金を徴収し、暴力をふるい、略奪をはじめると、偽ドミートリイ2世政権に対するモスクワ周辺の地方とロシア北部の蜂起がはじまった。小士族たちは、偽ドミートリイ2世の陣営からモスクワへと勤務替えし、ワシーリイ4世の立場は強化された。1609年春、スコピン＝シュイスキイのモスクワへの進軍がはじまると、同年夏から秋にかけての戦闘のなかで、偽ドミートリイ2世の軍勢は、スコピン＝シュイスキイ軍の勢いを止めることができなくなり、以前には僭称者に従属していた諸郡がワシーリイ・シュイスキイを合法的なツァーリと認めるようになった。スコピン＝シュイスキイのおかげで、ワシーリイは劣勢を跳ね返すことができた。

そうしたなかで、ポーランド＝リトアニア連合国家の君主ズィグムント3世が1609年9月に国境を越え、スモレンスクを包囲し、偽ドミートリイ2世に勤務するポーランド＝リトアニアのシュラフタに自らに勤務するよう呼びかけた。ズィグムント3世と彼らが合流することを恐れて、1609年12月、僭称者はひそかに自らの支持者たちとともにトゥシノからカルーガに逃亡した。偽ドミートリイ2世に仕えていた軍勢は西のスモレンスクに去り、1610年3月12日、スコピン＝シュイスキイとその軍勢は、救国の英雄としてモスクワに入った。

5. スコピン＝シュイスキイの死とツァーリ廃位

1610年春、スモレンスクを包囲するズィグムント3世軍への遠征のために軍勢の招集がはじまり、ワシーリイ4世の軍は、スウェーデンのデラガルディ率いる傭兵たちによって強化された。ところが、この軍勢を指揮するスコピン＝シュイスキイが1610年4月23日にモスクワで行われた宴席のあとで、23歳という若さで突然亡くなってしまった。スコピン＝シュイスキイは、ツァーリ位を請求することを恐れた夫であるワシーリイ4世の命令で、ワシーリイ4世の妻エカチェリーナによって毒を盛られたのだという噂が駆け巡った。この噂はただでさえ芳しくなかったツァーリの評判に決定的な打撃を与えた。

6月24日のクルシノ村の戦いで、ワシーリイの弟ドミートリイ・シュイスキイの率いる軍勢は打ち破られ、ポーランド＝リトアニアの軍勢はモスクワに近づいた。1610年7月17日、大貴族会議、



【写真3】 ヴワディスワフ4世、フランス・ルインクス、1639年頃

モスクワにいた士族部隊とモスクワ商業地区の集会で、ワシーリイ4世の廃位の決定が採択された。ワシーリイ・シュイスキイはこの決定に従うことを拒絶したが、自らの古い大貴族宮殿で見張りをつけられて拘留された。6月17日、廃位されたツァーリの士族からなる反対者たちは、強制的に彼を剃髪して修道士にし、モスクワのチュードフ修道院に幽閉した。そのとき彼の妻も剃髪させられて修道士となり、スーズダリの神の御母ポクロフ修道院に送られた。

イエス・キリストの真似びをする神の代理人たる「善良なるツァーリ」というイメージからはほど遠い振舞いによって、ワシーリイはそもそものはじめから評判が悪い人物であった。そのような状況のなかで、輝かしい軍功を立てた自らの甥ミハイル・スコピン＝シュイスキイを毒殺したという噂は、ワシーリイへの致命的な打撃となった。ワシーリイは、ツァーリの位から引きずり下ろされた。事実無根だというワシーリイの申し立てを信ずる者はいなかった。1610年8月、「貴族7人政府 Семибоярщина」⁽⁷⁾と呼ばれるロシアの貴族の上層部は、ズィグムント3世の息子ヴワディスワフ（のちに4世）【写真3】を自らのツァーリとして選出した。

(7) ワシーリイ・シュイスキイが廃位された1610年6月からモスクワがポーランド軍から奪還される1612年10月末までロシアを統治した大貴族による連合政権のこと。貴族7人政府の正確な構成は不明であるが、伝統的にフョードル・イワノヴィチ・ムスチスラフスキイ、イワン・ミハイロヴィチ・ヴォロティンスキイ、アンドレイ・ワシーリエヴィチ・ゴリーツィン、ボリス・ミハイロヴィチ・ルィコフ＝オボレンスキイ、フョードル・イワノヴィチ・シェレメーチエフ、イワン・ニキーチチ・ロマーノフ、以上の7名とされている。1610年7月24日の十字架接吻の文書には、上記のメンバーのほかにイワン・セミョノヴィチ・クラークン、ミハイル・アレクサンドロヴィチ・ナゴイの名前が挙がっている。Семибоярщина // Большая российская энциклопедия 2004-2017.

貴族7人政府は、ポーランド皇子ヴワディスワフをロシアのツァーリとして迎えるにあたって、ヴワディスワフがカトリックから正教に改宗することを絶対の条件としていたが、それは反宗教改革の闘士で厳格なカトリック教徒であるその父ズィグムント3世にとっては到底受け入れがたいことであった。今度は、ポーランド＝リトアニアの側に視点を移してスムータを見てみよう。

6. スウェーデン王としてのズィグムント3世（在位1592-1599）

ズィグムント3世は、スウェーデンのヴァーサ家の出身で、生まれながらスウェーデン国王でありながら、ポーランド王にも選出された。ズィグムント3世において、スウェーデンとポーランド＝リトアニアは合同国家を形成し、ズィグムント3世はこの連合国家の王として君臨する可能性もないわけではなかった。しかしながら、実際は、ズィグムント3世は、スウェーデンにもポーランドにも自らの居場所を見出せなかった。それは、早くからプロテスタントを国教としたスウェーデンと、宗教的寛容が支配的だったポーランド＝リトアニア連合国家の国情が、ズィグムント3世の個性とまったく合致しなかったからである。

スウェーデンは、グスタヴ・ヴァーサのもとでデンマークによる支配から脱し、1527年、グスタヴ・ヴァーサがヴェステロースの全国身分制議会で世襲国王として認められた。同じ時代、スウェーデンはルター派の影響を強く受けた。スウェーデンの多くの神学生が、ヴィッテンベルグで学び、マルティン・ルター、メランヒトンから直接影響を受け、1520年代はじめにルター派は北欧へと浸透しつつあった。「ルター派宗教改革は、一国の政治的統治者が教会統治権を掌握する『国教会体制』の樹立という点からみれば、ほかのどこよりも北欧において急速かつ最も完全な勝利をえた」⁽⁸⁾のだった。

グスタヴ・ヴァーサの子であるヨハン3世と、ポーランドのヤギェウウォ朝の血筋を引くカタジナの子ともであったズィグムント3世は、熱心なカトリック教徒であった母の強い影響のもとで、対抗宗教改革を主導するイエズス会士によって養育され、戦闘的なカトリック信徒に育った⁽⁹⁾。ズィグムント3世は、カトリック教会と王党派の大貴族に支えられたスペイン流の絶対主義王政を理想としていた⁽¹⁰⁾。これは、プロテスタントを国教とするスウェーデンでは、まったく受け入れられない態度であり、ズィグムント3世は国王を追われ、カトリック派は「リンチョピングの血浴事件」（1600）で肅清された⁽¹¹⁾。

(8) 百瀬宏、熊野聰、村井誠人編『北欧史』山川出版社、1998年、129-130頁。

(9) «Sigismund III Vasa», «History of Poland» // Encyclopaedia Britannica 2006.

(10) 山本俊朗・井内敏夫『ポーランド民族の歴史』三省堂選書、1980年、27頁。

(11) 武田龍夫『物語 北欧の歴史』中公新書、1993年、37-39頁。

7. ポーランド王としてのズィグムント 3 世（在位1587-1632）

ズィグムント 3 世は、母カタジナがヤギェウウォ家の出身であった縁から、1587年、ポーランド王に選出されるが、スペイン流の絶対主義王政を理想としたその精神性は、国際性、シュラフタ民主政、ルネサンス文化、宗教改革を基軸としたポーランド＝リトアニア連合国家の知的風土とも親和性がなかった。このような人物がなぜ国王に選出されたのかは謎というほかないが、ハプスブルグ家の影響力を排除すること、ズィグムント 3 世がヤギェウウォ家の血筋を引くことなどを勘案したうえでの、消去法的な選択であったのではないと思われる。

ポーランド王国が異教国家リトアニアと合同して成立した連合国家は、ヨーロッパ王家のネットワークのなかにあったが、井内敏夫が述べているとおり、「ポーランドの王は世襲王を名乗っていたが、結局は外来王であり、ポーランドの王は事実上選挙制だった。」⁽¹²⁾外国の君主の選出にともない、宮廷には君主の出身国の廷臣がつき従ったので、ポーランド＝リトアニア連合国はたいへん国際色ゆたかだった。ロシアが君主の要件としてのリューリクの血筋を大切にしたので、対して、ポーランドはあえて君主から血筋の一貫性を消したのである。

こうした「借り物」の王による選挙王政という不安定なシステムを生み出したのが、15世紀以降、騎士から直営農場を経営する地主へと脱皮していたシュラフタ⁽¹³⁾による議会議政だった。王が王として承認されるには、有力な社会層、すなわち、シュラフタに何らかの代償を支払う必要があったわけだが⁽¹⁴⁾、シュラフタ層が安定するにしたがって、ポーランド＝リトアニア連合国家では、強権を発動する君主を忌み嫌う政治文化が発達した。宗教改革運動もポーランド＝リトアニア連合国家におよび、広範なシュラフタ層がまずはルター派に、のちにはカルヴァン派に改宗した。彼らは、宗教改革を教会攻撃の道具として用いたが、シュラフタたちは宗教問題でさえ近代的な目で見えていたのだった⁽¹⁵⁾。

このようなポーランド＝リトアニア連合国家の、宗教にとらわれない精神風土も、ズィグムント 3 世とは異質なものであった。英国のポーランド史家、ノーマン・デーヴィスは、ズィグムント 3 世のおかれた不安定な立ち位置について、次のように述べている。

ズィグムント 3 世は、自らの力を超えた紛争の被害者だった。生まれはスウェーデン人である彼は、当然のことながら、スウェーデンの血筋を極めて重視していた。熱烈なカトリック教徒であり、ポーランドのイエズス会の門弟であった彼は、ポーランドが、北欧をプロテ

(12) 山本俊朗・井内敏夫『ポーランド』、14頁。

(13) 山本俊朗・井内敏夫『ポーランド』、15頁。

(14) 山本俊朗・井内敏夫『ポーランド』、14頁。

(15) 山本俊朗・井内敏夫『ポーランド』、19-23頁。

スタントからローマ・カトリックへと回復するうえで重要な役割が果たせると考えていた。これらの利害は、きわめて相容れないものであった。…戴冠のセイムでは、貴族たちが新しい不敬罪の定義を導入するのを、怒り心頭に見守るしかなかった。その定義によれば、どのようなかたちであれ、言葉で罵ったとしても、罪にならないことがはっきりと認められていた。これからは、彼は咎められることなく中傷されえたとし、じっさいに中傷されていた。彼がとくに憤慨していたのは、自分を「スウェーデンから輸入された、口のきけない幽霊」と呼んだ、元宰相ザモイスキの言い草であった⁽¹⁶⁾。

このように、スウェーデンとポーランドの王であるはずのズィグムント3世は、スウェーデンにおいてもポーランドにおいても、真の意味での支配者にはなりえなかった。ロシアでリューリク朝が断絶し、権力の空白が生じて社会が大混乱に陥ったとき、ズィグムント3世がそこに自らの新天地を見出したとしても、まったく不思議はない。ズィグムント3世は自ら兵を率いてロシアに侵攻するが、王朝的な利害をとまなうこの冒険主義的な行動のうらには、イワン雷帝に代表されるロシアの強い君主に対する憧憬があったと筆者は考えている。同時にそれは、ポーランド＝リトアニア連合国家のエリート層にとっても、絶対主義王政を目指す気難しい王を厄介払いできるチャンスであったし、ポーランド、リトアニアで成就できない野心を満足させ、地位や領地を得ようと欲した数千のシュラフタ、ヨーロッパ各国の傭兵たちが追随した。また、ロシアばかりかペルシアさえもカトリックへ改宗させる夢をいだいているローマ教皇パウロ5世とイエズス会も、ズィグムント3世を焚きつけた⁽¹⁷⁾。かくしてズィグムント3世は、スウェーデンだけではなく、ロシアをもカトリック化しようという野望に憑りつかれた。このような事情で、ズィグムント3世はスムータの影の主人公となっていったのである。

8. ポーランド＝リトアニアとロシアの大連邦構想

先に述べたように、ヤギェウウォ朝の断絶にさいして、イワン雷帝とその末子フョードルが、ポーランド王の候補として挙げたが、それはロシアも、ポーランド＝リトアニアも、異教徒、すなわち、オスマン帝国との対決という共通の目的をもっていたからである。イワン雷帝も強く望んだポーランド＝リトアニアとロシアの大連邦構想について、ロシアの歴史家、ボリス・フロリャは次のように述べている。

シュラフタの政治家たちはロシアを未開で野蛮な国であると見ていた。そこでは、「暴君

(16) Norman Davies, *God's Playground: A History of Poland, vol.1* (Columbia UP, 2005), p.329.

(17) ステファン・キューニェヴィチ編『ポーランド史1』(加藤一夫、水島孝生訳)、恒文社、1986年、215頁。

的に」統治をおこなう以外の統治方法がないのであった。出版者で、ロシアのツァーリの支持者であるピョートル・ミチェルスキによれば、モスクワ人たちの『野蛮な本性』は芸術によっても、よき習慣によっても、法の概念によっても涵養されなかったがゆえに、イワン4世は自分の命令を遂行させるために、「彼らを暴君的に統治せざるをえない」のだった。しかしながら、もしもツァーリが、ポーランドのもっと発展した文化的環境にいたら、話は別である。ミチェルスキが書いたところによれば、この場合は、「自らの人々とその習慣への嫌悪に貫かれたツァーリは、かくも高貴なるポーランド国民が好きになるだろう。」そして、ツァーリのあとを追い、全ロシア社会が追随するであろう。

シュラフタの政治家たちは確信していた。14世紀の後半にリトアニアとの王朝合同が締結されたのち、リトアニア、ベラルーシ、ウクライナの士族たちが、ポーランドの士族文化の影響をこうむり、ポーランドの習慣、制度、法規範を借用したように、今度は、ロシアとの王朝合同のあとには、ロシア士族が同じ道を歩むであろう、と。「もしも私たちがモスクワの帝位を自らのもとに引き寄せたならば、疑いもなく、かの地の野蛮は時が経つにつれて私たちによって改革されるだろう。」⁽¹⁸⁾

ロシアにおけるイワン雷帝の過酷な統治を知る者にとっては、ほとんど信じられない脳天気なほどの楽観主義だが、人間へのこの手放しの肯定的な見方を生みだす精神風土が、ポーランド＝リトアニア連合国家には確実に存在していた。

スムータの後半戦、クルシノ（クウーシィン）の戦いで、ドミートリイ・シュイスキイが率いる、兵力4倍のロシア軍を破り、一躍ポーランドの英雄となったスタニスワフ・ジュウキエフスキ【写真4】⁽¹⁹⁾も、偉大なるルネサンス的教養人の系譜に連なる人物であり、対抗宗教改革に凝りかたまつたズィグムント3世を懸命に諫めた。ジュウキエフスキは、『モスクワ戦争の始まりと成功』という回想録を書いているが、そのなかで、ズィグムント3世がその子、ヴワディスワフをツァーリに即けて戦争を終結させることの利を次のように説いている。

主なる神だけが正確に自らの望むことを成し遂げられるのである。人間がかかわることは、逆に、自然なこととして、万事が時間にもなってその始まりと成長がある。はじめは子供であるが、長ずるにおよんで大人となる。ヤギェウウォ王の合同から160年が経って、いまあるように、リトアニア大公位はポーランド王位との合同に到達したのである。ヘトマン⁽²⁰⁾はこのほか多くの理由をあげて、ロシア民衆の気風に合うように行動し、戦いを終わらせる

(18) Флоря Б. Иван Грозный. М., 2009. С.331.

(19) キェニェヴィチ編『ポーランド史1』、215頁。



【写真4】 ジュウキエフスキ、不明、17世紀

ほうがよい、なぜならモスクワ近郊で締結した和議で、共和国はもう十分な利益を獲得したのだから、と助言した。…しかし、陛下の耳は、ヘトマンの説得に閉ざされたままであった⁽²¹⁾。

ポーランドの歴史家、イェンドジェイ・ギェルトイフが指摘するところによると、次の点で、ポーランド＝リトアニア国家はロシアを自らの連邦に組み入れることができるという強い自負をもっていた。まず、ポーランド＝リトアニア側は、ルテニア正教会⁽²²⁾をローマ教会との合同に導いたのだから、モスクワもカトリックに改宗させることができると考えていた。また、1386年以来のポーランドとリトアニアとの国家合同がうまく機能しているのだから、ロシアとの国家合同も可能である、したがって、ギェルトイフの言葉を借りれば、「ポーランド人の心のなかでは、モスクワへの干渉戦争は侵略ではなく、僭称者たちを玉座に戻し、ポーランド＝リトアニア連合のモデルにしたがってポーランド＝ロシア連合を構築しようという、モスクワ人たちの要請に対

(20) 著者であるジュウキエフスキ自身を指す。ジュウキエフスキはこの回想録において、自らを一貫して官職名「ヘトマン」で呼んでいる。これは、『ガリア戦記』、『内乱記』で自らを、一人称を使わずに「カエサル」と称したユリウス・カエサルの模倣である。ポーランドがいかにローマの共和政文化を吸収しようとしたのかを示すエピソードとして興味深い。

(21) *Rękopism Hetmana Żółkiewskiego: Początek i progres wojny Moskiewskiej za panowania Zygmunta III* (British Library, 1835), pp.183-185; Jędrzej Giertych, *Expedition to Moscow: A Memoir by Hetman Stanisław Żółkiewski* (London, 1959), p.114.

(22) ガリツィア、ヴォルイニの帰一教会のこと。ユニエイトとも呼ばれる。帰一教会は正教の典礼を守りながら、ローマ教皇の首位権を認めていた。

する自分たちからの回答だった。」⁽²³⁾。

ジュウキエフスキはこのようなポーランド＝リトアニアの大方の見方に批判的だった。ギェルトイフはつぎのように論評している。

ジュウキエフスキは植民帝国を造ろうとしたわけではなく、モスクワ人たち、あるいはその一部が、自分たちの国をポーランドに近づける方向において再編することを手伝おうとしただけだった⁽²⁴⁾。

すなわち、ジュウキエフスキが目指したのは、ルネサンス的寛容の精神で国家連合を作ることだったと思われる。しかしながら、ギェルトイフによれば、それは前提が間違っていた。すなわち、「ポーランド＝モスクワの政治的紐帯を作るという構想は、ポーランドがシュラフタとマグナートによって統治されているのと同じ方法で、モスクワがボヤールによって統治されている」という誤解に導かれたものであった。

これらのポーランド＝リトアニア側の思惑に対して、戦乱に疲弊していたロシア人、ことに貴族7人政府に代表される大貴族たちはただちに反応し、ポーランド王子ヴワディスワフをロシアのツァーリに迎えるという妥協案を歓迎した。このことは5.においてすでに述べた。1610年2月4日に締結された協定では、ロシア側がヴワディスワフをツァーリに迎える条件として、ロシア正教信仰の不可侵と臣民の自由を権力の横暴から防ぐ権利が謳われていた⁽²⁵⁾。それはとりもなおさず、君主の権限に一定の制限を設けて、ツァーリ専制から貴族の合議制へと国家を改造しようとする画期的な試みでもあった。のちに専制擁護、正教護持の理念にもとづいてスムータ史を書いたアヴラーミイ・パーリツィンも、この妥協案を受け入れている⁽²⁶⁾。このことからわかるとおり、それはそのときロシアに許されていたほとんど唯一の選択肢だった。

ズィグムント3世において、弱いポーランド＝リトアニア君主が伝統的に強いロシア君主を憧れたように、伝統的に弱いロシア貴族は、君主から各種の権利を保障された強いポーランド＝リトアニア貴族に学ぼうとしたわけである。しかしながら、それは同床異夢というべき状態で、ポーランドとロシアの連邦構想は、結局、破綻した。その実現を不可能にした最大の要因は、まさに宗教的な確執だった。ロシア側はロシア正教の不可侵を強く主張する一方、対抗宗教改革の旗手、ズィグムント3世は、ヴワディスワフの正教への改宗を認めなかったばかりか、自らがツァーリ

(23) Giertych, *Expedition to Moscow*, pp.21-22.

(24) Giertych, *Expedition to Moscow*, p.29.

(25) Ключевский В.О. Сочинения в девять томах Т. III. Курс русской истории. М., 1988. С.39-41; クリュチェフスキイ『ロシア史講話3』、恒文社、1982年、53-55頁。

(26) «Авраамий» // Русский биографический словарь. СПб., 1896.

となってロシアに乗りこみ、ロシアをカトリック化すると意気込んでいた。

9. ロシア民衆の専制擁護と正教護持のパトス

かくして、スムータは最終局面に突入していくことになる。ロシア貴族によってツァーリと認められたヴワディスワフをロシア正教に改宗させるか否かをめぐる問題について、ポーランド側は、既述のように、宗教的寛容派とカトリック強硬派が対立していたため、曖昧な態度に終始せざるをえなかった。事態が膠着状態に陥ったとき、正教護持をはっきりとした目標に掲げた、第一次国民軍が組織される。ロシア民衆は、ポーランドと和解しようと試みる貴族層に対して公然と反旗を翻したのだった。

リヴォニア戦争が勃発した1560年代から、ポーランド＝リトアニアとロシアは慢性的な交戦状態にあったが、事ここにおよんで、両者の軋轢は、はっきりとカトリック対ロシア正教の宗教戦争の様相を呈することになった。

第一次国民軍が崩壊したのち、1611年9月にニージニイ・ノヴゴロドの商人ミーニンの主唱で第二次国民軍が組織された。1612年1月、投獄されていたモスクワ総主教ゲルモゲンが獄死すると、ロシア民衆のポーランドへの敵意はますます燃え盛ることになる。1612年10月26日、第2次国民軍によってモスクワがポーランド軍から解放されたことは周知のとおりだ。

第2次国民軍は帝政時代から現代にいたるまで、ロシアの英雄として讃えられているが、ロシア民衆のこのパトスが具体的にいかなるものであったかを垣間見せてくれる史料がある。1580年代初頭にポーランド王、ステファン・バトーリがロシアに攻め込み、5か月間ロシア西辺の商都プスコフを包囲したときに、その直後に、包囲戦の経緯を、プスコフの住人でイコン画家のワシーリイという人物が記している。この『プスコフ戦記』⁽²⁷⁾にあらわれた専制擁護と正教護持の熱狂的パトスは、スムータを終結させた国民軍のそれと通底するものがある。ここでは、ロシア民衆の政治的パトスが特徴的に現われている、相互の君主の性格づけに絞って見てみよう。

この史料における、ツァーリ、イワン雷帝への見解は以下のとおりである。

私たちの敬虔なるキリストを愛する君主、ツァーリにして大公、全ロシアの専制君主、イワン・ワシーリエヴィチは、正教キリスト教のロシア帝国をしかるべく統治し、近隣の信仰をもたぬツァーリ、王、私たちの君主と戦い、これを責めさいなむ軍勢の首領たちから、正教徒たちのロシア帝国とそのツァーリの高き右手のもとに暮らすすべての人々を防衛し、守

(27) *Повесть о приходе Стефана Батория на град Псков (Подготовки текста, перевод и комментарии В.И. Охотниковой)* // Библиотека литературы древней Руси (Дальше БЛДР). Т. 13. С.534-607, 818-825. 邦訳がある。三浦清美、「中世ロシア文学図書館 (VI) プスコフの歴史と文学① ステファン・バトーリイのプスコフ来襲の物語」『電気通信大学紀要』第27巻 (通巻43号)、2015年、61-89頁。

護してきた。ことにツァーリたちは聖なる教会と尊い修道院のため、聖なる正教のキリスト教信仰のため、敵たちに対して厳しく当たり、闘い、守護してきた。なぜなら、キリスト教のツァーリは、神によって宇宙の四方の隅々まで君臨する最高の玉座に据えられ、聖なるキリスト教信仰を守り、それを揺るぎなく固め、無垢なるままに守り抜くことを命ぜられていたからである⁽²⁸⁾。

暴政をおこなったイワン雷帝は、ロシア正教の戦闘的な守護者として位置づけられている。つづく一節では、イワン雷帝の統治と征服活動が次のように正当化されている。

神の恩寵と、聖なる神の御母と偉大な聖なる奇跡成就者たちの祈りによって、君主なるツァーリ、全ロシアの大公、イワン・ワシーリエヴィチは、神の敵たちへの復讐者となったばかりではなく、その高い徳によってリヴォニア全土の君主ともなったのである。敵軍のなかには、武をもって町を占拠した者たちもいたが、彼らは仮借なく命を奪われた。自らの妻と子供たちとともに君主なるツァーリに叩頭して降伏する者たちもいた。君主はそうした者たちには仁慈をもって臨んだ。武装して頑強に抵抗した者たちもいたが、そうした者たちに対しては、城砦を基礎にいたるまで破壊し、ありとあらゆる、さまざまな酷い責め苦で、妻や子にいたるまで人間たちを死にいたらしめるように命じた。ほかの者たちが恐れるようにするためである⁽²⁹⁾。

それに対して、ポーランド王にしてリトアニア大公ステファン・バトーリは悪の権化として描かれている。

ステパンは傲慢このうえない彼らの進言をよろこんで受け容れた。このリトアニアの王自体が猛り狂った獣であり、倦むことを知らぬ猛毒のコブラであって、自らのルター派信仰の戦士であり、つねに流血と戦乱のはじまりを喜んだからである。酷烈で残忍な蛇の毒を、飽くことを知らぬ自らの腹のなかから吐き出すと、この男は自らの軍勢に武装し、準備を整えるように命じた。…尊大なるこの男、ステパンは、和平の呼びかけに耳を傾けようとせず、君主の使節たちを不敬なる侮辱的な言辞で拒んだ。そればかりではなく、独りよがりで悪意と毒に満ちたこの男は、毒のはらわたから毒を注ぎかけ、凶暴さを発揮し、悪魔のようにおごり高ぶって、栄えある町、プスコフにも侵略を企てた。いわく、「そなたたちの栄えある

(28) БЛДР. Т. 13. С. 534-535.

(29) БЛДР. Т. 13. С. 536-539.

偉大なるプスコフを我がものとしよう。石の碾き臼のようにこの町を改宗させ、私はその君主におさまることにしよう⁽³⁰⁾。

…自らがプスコフに近づいたと知ると、ステパンは飽くことを知らぬ毒蛇のように底知れぬ自らの罅を開き、プスコフの町を一飲み飲みこもうとした。大きな洞窟からは出る獰猛な大蛇のように、ステパンは喜び勇んでプスコフに飛んできた。黒雲のなかで光る火花のように、配下の怪物どもとともにプスコフに飛んできた。配下の毒蛇と同盟者の蛇たち、サソリらとともに、巨悪なるリトアニアの王は嘔吐物をたらふく食ったと自慢した⁽³¹⁾。

以上の引用から、16世紀後半からすでにロシア側はポーランド＝リトアニアを激しい憎悪の目で見ており、17世紀初頭の時代にはもはや、両者の和解の余地はなかったことがわかる。戦いを通じて相手を知り、やがて手を取り合うということが人間の歴史においてはしばしば起こる。事実、17世紀初頭、ロシア有力貴族の連合政権（貴族7人政府）は、絶対的な命令者であるツァーリを頂点に戴くという原則から離れて、ポーランド皇子であるヴワディスワフをツァーリに迎える決定を下した。ロシア有力貴族たちは、貴族が王の権力を制限するポーランド＝リトアニアの文化的環境に強い憧れを抱き、ポーランド出身のヴワディスワフならそれを実現してくれるだろうと期待したのである。しかしながら、民衆においては、そうした統治文化の相互交流は絶対に受け入れられないものだった。ステファン・バトーリとの戦いのあと、ロシアの民衆において敵意が一層先鋭になったことは、以上の引用から見て取ることができよう。

ルネサンスの高揚のなかで宗教対立が極力前景化しないように配慮してきたポーランドとは異なり、ロシア側は意識下で、ポーランド＝リトアニアとの係争を一貫して宗教戦争と捉えており、最終局面ではじめてそれが露わになったというのが、事態の真相ではなかっただろうか。2022年2月24日にはじまったロシア・ウクライナ戦争では、意識下にうごめくこの宗教意識と同じものが活発に動き出したように思われる。筆者がさまざまなメディアで主張してきたように、ロシア・ウクライナ戦争は本質的には9.11と同じ宗教戦争であり、きわめて慎重な対処が必要とされていることを忘れるべきではあるまい。ロシアの振舞いは悪いことには違いないにしても、ロシアを切り捨てて終わりという対応では、世界全体が滅亡の危機に瀕するのではないのか？

(30) БЛДР. Т. 13. С.540-543.

(31) БЛДР. Т. 13. С.558-559.